

7-11		主題	お口から楽しい食事をいつまでも	
口腔ケア		副題	明るい表情や言葉を交わせる喜び	
研究期間	9ヶ月	事業所	介護老人福祉施設 ひらお苑	
発表者：漆原 千智		アドバイザー：津田 恵子		
共同研究者：食事係				
電話	042-331-5666	メール		
FAX	042-331-6006	URL		

今回発表の事業所やサービスの紹介	新百合ヶ丘駅からバスで5分ほど、緑に囲まれた施設です。174名の利用者が4フロアで生活されています。平均介護度は3.9、介護度4・5は70%、平均年齢86歳、食事の全介助者は23%、胃ろう対応者は7.6%です。又栄養係では見た目もよく食べやすい「ソフト食」、「高栄養食」の提供に積極的に取り組んでいる。介護員も各係活動に参加し「利用者のサービス向上」に取り組んでいる。
------------------	--

<p>《研究前の状況と課題》</p> <p>①各フロアごとに食事前の口腔体操に取り組んでいるが、対象が要介護度1～3（自立～一部介助）であり、要介護度の重い方の参加が難しく対応できない現状である。</p> <p>②要介護度の重い方の食事摂取状況の共通点として、咽込み、溜め込み、開口が良くないなど嚥下機能に何らかの支障をきたしている。</p> <p>③上記のような利用者は食事に時間がかかり疲労が見られたり、楽しみなはずの食事が苦痛にも感じられる様子が見られる。</p> <p>④また誤嚥性肺炎の危険、胃ろうとなる可能性もあり食事を楽しむ事が出来なくなるかもしれないというリスクがある。</p>	<p>《研究の目標と期待する成果》</p> <p>①嚥下機能に支障のある利用者に対して個別の口腔体操（マッサージ）を実施し、口に刺激を与え、活性化を図り、咽込みや溜め込みの軽減を図り、安全で苦痛のない食事摂取をすることで、スムーズな摂取及び食事量の増大に繋げる。</p> <p>②高齢者にとって食べる事は生命維持に直結する最も重要なこと、また大きな楽しみのひとつとして食べられる喜びをいつまでも感じてもらい、安全で苦痛のない食事に繋げる。</p> <p>③ひいては豊かな表情を生み出し、生活の活性化がされることで生きる力に繋げる。</p>
---	---

《具体的な取り組みの内容》

- ① 食事係が係年度目標に嚥下機能に支障がある方に対して個別で口腔体操（マッサージ）を取り入れる。（4月）以降食事係が中心となり取り組む。
- ② 食事係が嚥下機能に関する研修に参加し、情報収集を図る。
- ③ ご家族の意向を聞き、対象者を各フロアごとに選ぶ。
- ④ 医務と連携し訪問歯科に対象者の情報を提供し、口腔体操の内容の相談、検討をする。
- ⑤ 実施に当たり現場でどのような（誰が、何時、状況）に記載するなどを検討する。
- ⑥ 統一した記録用紙、モニタリング用紙の決定、記録の時期、方法などを検討する。
- ⑦ フロア介護職員へ実施する口腔体操（マッサージ）の指導を行い、記録の仕方について伝達を行う。
- ⑧ 対象利用者への口腔体操の実施を開始する。（10月～）
- ⑨ 毎日の実施記録と定期的なモニタリングを行い、疑問点に関して訪問歯科、医務、相談員、介護室長、機能訓練、栄養係に相談、確認を行いながら実施する。
- ⑩ 今回の取り組みは7名の利用者を対象とした。その中でレベルアップを図れた利用者1名の事例を通し経過発表をおこなう。

《取り組みの結果と評価》

高齢者に長期的、継続的に口腔体操を実施することは難しいこと、個々の状態にもよることなど、対象者全員の嚥下機能向上、摂取状況のめざましい改善までに繋がられなかった。今回取り上げた利用者は口腔体操を家族の協力、介護員の毎日の実施により、徐々に咽込み、溜め込みが少なくなった。また食物を飲み込むだけであったが咀嚼をするようになった。さらにほとんど発語が聞かれなかったが声かけによく返答、簡単な会話のキャッチボールができるようになった。家族も表情が明るくなりうれしいとの感想を述べられている。

《まとめ》

全体的に大きな変化は見られないものの、個人差はあるが、効果を得ることもできた。毎日個別に口腔体操を実施する積み重ねが重要なこと、継続することの難しさを体感でき、高齢者がもっと食事を楽しむために何ができるか工夫が必要であると感じた。その反面利用者自身が本当に食べ続けることを望んでいるのか、マッサージを嫌がる利用者を見てどこまで望んでいるのかと疑問を感じる場面もあった。利用者、家族の真のニーズ、思いを大切にし、目標、目的が職員のエゴにならないよう十分な配慮が必要であると感じた。

《提案と発信》

今は食事が口から食べられなくとも胃ろうという方法で生命を繋げていける。当施設では高齢者の食べる楽しみを大切に考え、食事内容の工夫、ソフト食、高栄養食の提供、嚥下機能の研修参加をとおり勉強会を行うなど、栄養係、介護係、看護係などと連携を図り、なるべくいつまでも口から食事が摂取できるよう取り組んでいます。

【メモ欄】追加資料 有 無